

専攻演習へのゼミ・プロジェクト(サービス・ラーニング)の導入

サービス・ラーニング・センター チェア

リベラルアーツ学群・国際協力専攻 牧田 東一

1. 桜美林大学のサービス・ラーニングについて

本学における SL の規定は、科目の授業外学習時間を使って 2 単位科目であれば 20 時間程度、4 単位であれば 30 時間程度の社会的な活動を義務付けることである。授業内等での振り返りを通して、活動を通しての学びを深め、共有化すると同時に、授業での学習との相互作用(知識の確認や応用)をはかり、かつ市民としての自覚、責任の認識、行動や態度の変革を求める。また、学生の活動を通して地域社会への貢献も期待される。活動は以下では簡便にボランティアと称するが、その範囲は社会福祉的な活動にとどまらず、環境保全、政治的な活動(例えば、選挙ボランティア)をも含むことができる。

2015 年度は春秋学期合計で 63 科目が SL 科目であり、444 名が履修した。ボランティア活動は国内 62 か所、海外 12 か所で行われ、総時間数は約 9000 時間となっている。

2. 専攻演習Ⅰ、Ⅱへのサービス・ラーニングの導入

筆者の専攻演習(以下、ゼミ)は国際協力のゼミであり、毎年 20 数名～30 数名のゼミ生を抱えている。国際協力専攻を中心に、国際関係、英語、コミュニケーション等の学生が参加する。積極的、行動的な学生が多く、ほぼ全員が様々な職種に就職する。

SL を導入したのは 2015 年度からであるが、それ以前のゼミの内容は春学期は関連する英語文献の輪読、秋は各自がテーマを定めてのゼミ論文の執筆である。学生中心の運営を心がけており、課題も少なくないゼミである。そこに、一学期に 30 時間のボランティア活動を付加することで、学生がどのように反応するのか、ゼミ生が減るのではないか、また活動をどのように教員がモニターし、適切に指導するのか、大いに不安な出発であった。しかし、SLC の仕事を通じて、BM や健福の教員の何名かがゼミ・プロジェクトで地域貢献を行っていることを知っていたため、決意した。

大きな問題は活動をする場所であり、20～30 名の学生を一か所で引き受ける場所はない。また、国際協力とどのように関連付けるかも課題であった。2015 年度の春学期には、

5～6の候補を示し、また自分で探してもよいとして開始した。それぞれの活動内容はゼミ内で発表する機会を設け、所定の用紙を用意してそこに活動記録を書かせ、活動先のスタッフにサインをしてもらうことで、活動の内容と時間の管理を行った。しかしながら、活動場所がバラバラでは管理と指導が難しく、学生間のシェアも困難であった。そこで、秋学期から4つのプロジェクトを定め、学生のリーダーとサブリーダーを決めて、チームで活動することとした。4つとしたのは、学生に選択肢を提供することと、1チームが5～6名であるのが適当であろうと考えたからである。こうして、以下に述べる4つのゼミ・プロジェクトが2015年秋学期からスタートした。

3. 4つのゼミ・プロジェクト

ここでは、4つのプロジェクトの概要を述べる。

寿町プロジェクト：三大寄場の一つである横浜の寿町でのホームレスの人たちへの炊き出し、バザー、スタディツアー「寿さんぽ」などの活動である。寿町にある日本キリスト教団なか伝道所と神奈川教区寿地区センターをメインの引受先として、月に1～2回のペースで活動が行われている。ここを選んだ理由は筆者自身が引受先と関係を持っていることと、学生のボランティア受け入れに積極的であることである。可能な活動も幅広くあり、ゼミ論・卒論などへの展開のテーマにも事欠かない。ゼミが始まる前の2年生の年末年始に同地区で行われる越冬闘争（年末年始に毎日炊き出しなどを行う活動）への参加を義務付けており、学生たちにも馴染みが深い。横浜、湘南方面の学生には交通の便がよい。

都路プロジェクト：福島県田村市都路町という原発被災地での復興支援のプロジェクトである。田村市復興応援隊という組織にゼミ卒業生が働いており、2015年度の夏合宿で都路町を訪問した。それを契機として協力を仰いで復興支援のお手伝いができないかということから始まった。都路は原発から20kmと30km圏に分かれており、一部では住民が戻ってきているが、まだ半分程度にしかいない。小学校は2016年度から再開されている。農業地域のため風評被害が深刻であり、またもともと過疎地であるため、復興は容易ではない。プロジェクトは都路を知らせる、住民の思いを伝えるというテーマで学内イベント等での発表が行われている。

カンボジア・プロジェクト：夏休みにゼミ生有志で行う、プノンペンにあるスラム出身の虐待児の保護施設でのボランティアを中心に、その準備や学習、帰国後の学内イベントでの発表などを行う。夏休みの訪問時には筆者も同行して、現地でも指導を行っている。学生たちのアイディアで、小田急線高座渋谷駅近くのいちょう団地でのインドシナ難民の子

どもたちへの学習支援も併せて行うように展開が模索されている。最も国際協力らしい活動であるが、実際にカンボジアに行ける期間が限られており、国内での活動のモチベーション維持が難しい。

選挙プロジェクト：ゼミでの時事問題討論の中で出てきたアイディアである。2016年7月に参議院選挙があったため、そこに向けて、若者の投票率をあげることを目的に学内で政治意識のアンケート調査、町田市選挙管理委員会と協力して模擬投票や投票の呼びかけを学内、近隣で行った。また、町田市教育委員会の生涯学習センターが実施している町田市民講座の法学講座と国際学講座に学生が参加し、最終回に多くが退職高齢者である受講者と桜美林大学の学生が政治の話題で対話するワークショップを実施した。また、市民企画講座であるシティズンシップ教育講座にも参加し、大学におけるシティズンシップ教育をテーマにワークショップを実施した。

4. サービス・ラーニング導入による教育効果(学生の評価)

現3年生のゼミはまだ終了していないが、秋学期の始めに学士力の規定の観点にそった質問を学生にぶつけるアンケートを実施した。回答は以下の通り。A：大変そう思う、B：ややそう思う、C：あまり思わない、D：全く思わない、E：わからない

質 問	A	B	C	D	E
対象となっている社会問題について基礎的な知識を得ることができてきたと思いますか？	10	19	2		1
社会人としての常識やモラルについて理解を深め、自らがどのように貢献できるのかを自覚できるようになってきたか？	8	21	1		2
対象となっている人々が自分とは違う文化の中で生きていることを理解できるようになってきましたか？	19	10	1		2
対象となる人々やプロジェクトの仲間との、コミュニケーション能力(読み・書き・聞き・話す)は向上してきたか。	12	12	7		1
社会生活を営む上で必要な他者をおもいやる豊かな人間性が身についてきたと思いますか。	10	21			1
自分の思いや考えを適切に表現することができるようになってきたと思いますか。	8	18	6		
多種多様な情報を収集・分析し、結果を複眼的、論理的に表現できる力は育ってきていると思いますか。	6	17	6	1	2
学習や活動に取り組む際、自分自身の行動についての問題や課題を常に意識して、問題を発見する力はついてきているか？	10	13	8		2

問題や課題について何をどうすれば解決に導くことができるのかを考え、実行する行動力は高まってきているか。	9	18	5		2
社会の規範やルールに従い自らを律して行動ができ、社会の発展のために積極的に関わるできるようになってきたか。	4	21	6		1
かかわってきた問題を学び続け、自分の役割を自覚することができるようになってきたと思いますか。	8	16	8		1
社会と自分の関わりに視野を広げ、自己管理能力と社会的倫理観を高めることができてきたと思いますか。	5	14	7		6
他者と協調・協働して行動できるようになってきたと思いますか。	12	13	6		1
社会に貢献できるリーダーシップをもって他者に対して方向性を示し、自ら先頭に立つことができるようになってきたか。	3	20	7	2	2
プロジェクトに参加したことに満足していますか	15	11	5		1
後輩にこのゼミの内容を勧めますか	15	13	1	1	2

5. サービス・ラーニング導入による教育効果(筆者の観察)

学生の自己評価をどう解釈するかであるが、学士力規定で書かれている内容を学生が正しく理解できているのか、自分をどのように正しく評価できるのか、どれだけ正直に書いたのか、などいくつかの疑問があり、留保が必要であると考えられるものの、学生たちの多くは学士力規定の各項目において自分がある程度成長したと考えていると言えるのではないだろうか。筆者の観察もほぼ学生たちの自己評価と同じである。こうした成長が、プロジェクトによって促進されただろうと筆者は考える。

しかし、それ以上に確かなことは、学士力の規定が述べている学生の「力」はプロジェクトのような社会参加を伴う活動なしに、授業を受動的に受けているだけで育つことはまず考えられないということである。教室内でのアクティブラーニングでもなかなか達成を期待するのが難しい項目が並んでいる。筆者の考えでは、学士力規定はサービス・ラーニングを必要とする、あるいはそれに適した規定である。

他方、課題も多い。第一に、アンケートに見られたようにプロジェクトに否定的な学生が少し見られることである。現実には、数名が秋学期からゼミの履修を辞めている。学生負担が大きいことは事実である。活動に時間がさけない経済的に厳しい学生にとっては、活動に必要な交通費負担(特に遠方の場合)もまた大きい。第二に、活動先とのコミュニケーションのミスなどである。社会人の人たちの好意に依存している部分が大きく、学生たちはまだ自分たちの真意を伝え、相手の気持ちを押し量ることが十分にできない。ある程度

のトラブルは覚悟しなければならない。そこは教員がカバーする必要がある。第三に、学士力の規定に沿うならば、そこで述べられている「力」をより効果的に獲得できるように、プロジェクトの進め方、コミュニケーションの方法、企画の立て方、ミーティングの進め方などの技術的な側面をより強化する必要がある。最後に、教員の負担の問題である。プロジェクトを複数実施するのは教員にとって楽しい面もあるが、負担は重い。何らかの教員への支援が必要であると実感している。



牧田 東一